

ハイデガー・フォーラム第 21 回大会

発表要旨 1

(統一テーマ：身体)

故障状況論から構想する『存在と時間』の身体論

身体を魂の牢獄としたプラトン以来、この身体観はキリスト教を媒介としつつ哲学史を通じて繰り返し現れてきた。ハイデガーはその伝統解体的な姿勢にもかかわらず、身体について主題的に論じることがなかったという沈黙は、とりわけ現存在の実存論的分析論を展開する『存在と時間』(以下 SZ) において問題視されてきた。そのため本発表は、同書の故障状況論と世人論という二つの議論を身体の問題へと適用することで、基礎存在論において身体が占めるべき存在論的地位について考察することを目的とする。

まずハイデガーは身体には寡黙であったが手には饒舌であったという不均衡に着目したい。SZ の環境世界分析論 (§15-18) は、道具の分析に際して槌を振るうなどの具体的な行為について考察し、さらに「手」というキーワードのもとに存在者の存在様式を明らかにしてゆくなかで、これらの前提であるはずの身体は不問に付されている。この等閑視の要因は、故障状況の議論に見出すことができる。ここでは、没入的な活動からの離脱の度合いに応じた仕方世界内部的存在者の在り方が前景化する過程が示されているのだが、円滑な活動の阻害の例として道具の側の故障状況しか取り上げられなかった点は注目に値する。というのも、身体の不調や行為の失敗、身体と環境との不和からもこの円滑さは阻害されうるのであり、ここには、ハイデガーに想定される行為者はきまって熟達した職人、健康なエキスパートであった、という彼の行為論における健全な前提が伺えるからである。よって、SZ の議論を身体論へと展開するとしたら、この点から出発するのが一手だろう。つまり、故障状況の議論を身体へと拡張することで、どのような洞察が得られるのか考察したい。

本発表は、Dreyfus の解釈を応用して、故障状況論の身体への拡張を段階にわけて考えてみる。道具の故障状況において活動の円滑さが阻害されることで、道具の存在が目立たしいものとして前景化するとともに、そのものを規定する背景的全体が浮上する。たとえば、軽微な故障の場合には、その「役に立たなさ」において逆に道具の *Zuhandenheit* という存在様式と、それを規定していた指示連関とが前景化する。同様に、第一段階として身体の軽微な故障においては、痺れや疲労を伴う身体部位の物的性格が前景化するとともに、これまで私たちのスムーズな行為を導いてきた習慣のコンテクストが前景化する、と考えることがで

きる。次いで第二段階の深刻な病や負傷を契機とする場合において現れるのは、習慣的身体の秩序が後退し、物理的・生物的「法則」という新たなコンテキストに基づいた事物的身体（Körper）である。第三段階では、哲学的主題化のもとで魂に対置される単なる身体という形而上学的概念が成立する。ここで、私たちがさしあたり生きているのは、第一の習慣的身体（Leib）にほかならない。

重要なのは、この習慣的身体が個人的でありながら社会的でもあるという点である。なぜなら、現存在は被投性において特定の世界に投げ込まれており、何が「できること」として現れるかは公共の世界の側からあらかじめ分節化されて与えられるのだが、個々の現存在はこうした被投的な慣習を自らの可能性としてわがものとしてゆくことで習慣として体得するからである——ここには被投的企投の運動がある。また、こうした慣習の源泉を、個々の行為の失敗や軽微な故障を超えた、全面的な身体と環境との不和において発見することができる。そのとき開示されるのは、これまで諸行為を方向づけてきたコンテキストそのものが、あらかじめ特定の規範的身体、いわば〈世人的身体〉を中心として組織されていたという、ハイデガーの行為者が前提してきた暗黙の構造である。

この意味で、身体は世界内部的存在者とは異なる存在論的地位をもつ。というのも、Zuhandenesの指示連関はUm-zu構造によって規定されている以上、指示連関は行為の連関に裏打ちされていて、この行為の連関は世人による規範的な基盤をもつ——そして、世界内部的存在者はこうした連関の内部に位置付けられることによって規定されるが、身体とはこの連関の内部にはなく、むしろこの連関を担うものだからである。世人の慣習から各私的な慣習への移行において、身体は不可欠な役割を果たす。慣習はいわば公共的で非人称的な行為パターンだが、習慣とはそれがこの身体において体現され、反復を通じ沈殿し、もはや主題化されることなく遂行されるようになったものである。身体を受肉化した習慣と見ることで、身体は皮膚によって区切られた静的な事物なのではなく、環境に埋め込まれた被投的企投の動的な場として、世界との親しみや不和を生じさせる世界内存在としての現存在にとっての隠れた核心であることが判明するのである。

ハイデガー・フォーラム第21回大会

発表要旨2

(特集：ベルクソン)

道具と器官 ——ハイデガー『形而上学の根本諸概念』第二部と ベルクソン『創造的進化』

本発表は、ハイデガー『形而上学の根本諸概念』第二部とベルクソン『創造的進化』を比較しつつ、「道具」と「器官」の関係を軸に、いわゆる「生の哲学」の存在論的基礎をある種の技術哲学の観点から再検討することを目的とする。

ハイデガーは『存在と時間』第10節において、「生の哲学」が現存在の存在論を暗黙に志向しつつも、それを明示的に遂行していない点を「原則的欠陥」として批判する。他方で、「生の哲学」(Lebensphilosophie)という呼称自体が「植物の植物学」(Botanik der Pflanzen)に等しい冗語であるとも述べ、哲学が本来的に「生」に関わる営みであることを示唆する。ハイデガーにとって重要なのは、現存在の存在を身体・心・精神といった諸契機を加算によって(summativ)構成することはできず、また一般生物学(allgemeine Biologie)に基礎づけることもできないという点である。生命の存在論は、現存在の存在論の内部において、いわば「欠如的(privativ)解釈」としてのみ接近されうる。しかしながら、この枠組みにおいてさえも、生命は単なる手前存在(Vorhandenheit)でも現存在そのものでもなく、両者からはみ出したところに位置づけられる独自の存在様式として理解されている。

この点について、『存在と時間』における「手元存在(Zuhandenheit)」と「手前存在」の区別が手掛かりになるかもしれない。通常この区別は道具的对象に限定されるが、本発表はこれをより広い存在論的区別として捉える立場をとる。この再解釈は、近年、思弁的实在論(SR: Speculative Realism)を牽引する思想家の一人と目されているグレアム・ハーマン(Graham Harman, 1968-)が、『道具 - 存在 ハイデガーと諸対象の形而上学』(Tool-Being. Heidegger and the Metaphysics of Objects, Chicago: Open Court, 2002)において提起している再読解の方向性(道具存在論)とも響き合い、諸対象一般の存在論へと通じる可能性をもつ。また、現存在が自己自身を「使用する」存在であるという点、すなわち時間を使用し計算する存在であるという洞察は、道具性が人間存在の内奥にまで及んでいることを示唆する。

こうした文脈のもとで、『形而上学の根本諸概念』第二部は、生の哲学や生物学に警戒するハイデガーにおいて特異な位置を占める。ここで彼は、器官を単なる道具として、あるいは有機体を機械として理解することに疑義を呈し、道具・用具・機械の本質的区別を提示する。とりわけ、道具の有用性が「～のために (für)」準備されていること (Dienlichkeit) に存するのに対し、器官の有用性は「～することができる (zu)」という能力性 (Fähigkeit) に関わる点が強調される。器官とは、単なる手段ではなく、可能性の様式として理解されるべきなのである。

これに対してベルクソンは『創造的進化』において、生命 (vie) を本質的に「生き残ること (survie)」として捉え、本能と知性をともに生命の延長のための手段とみなす。本能は有機的道具を組み立てる能力であり、知性は無機的道具を製作する能力である。両者は共通の道具主義に貫かれており、生命は物質を取り込み、それを行動のための「器官＝道具 (organe)」へと変形する運動として理解される。知性は単なる物質操作にとどまらず、空間化や数理化へと自己を延長する能力であり、この点にベルクソンの技術哲学の独自性がある。

有名な論文「機械と有機体」(1947年)において、ベルクソンの生氣論がこのように生命による物質の有機組織化と、発明や技術の問題系を結びつけている点に初めて注目したが、フランス科学認識論の代表的哲学者ジョルジュ・カンギレムであった。「ベルクソンは、機械発明を生物学的な機能として、つまり生命による物質の有機組織化の一側面として考えた、唯一のではないとしても、稀なフランス人哲学者の一人である。『創造的進化』は、いわば一般器官学 (organologie générale) 概論である」。生命は有機体を産出するだけでなく、無機物をも取り込み、それを巨大な器官＝道具へと転化する。すなわち、技術や機械は生命の外部にあるのではなく、生命の器官化の延長として位置づけられるのである。

以上のように本発表は、ハイデガーとベルクソンの共通点 (道具存在論) と差異 (器官と道具の根底的区別／連続性) を検討することを通じて、両者の「生命-技術論」をより正確に理解するための新たな理論的視座を提示する。

ハイデガー・フォーラム第 21 回大会

発表要旨 3

(自由テーマ)

問いとしての自己の経験と救済史的歴史性 ——初期ハイデガーのアウグスティヌス解釈における歴史性の問題

ハイデガーはパウロ書簡を取り上げた 1920/21 年冬学期講義「宗教現象学入門」の冒頭で「事実は生は歴史である」(GA60, 80) というテーゼを掲げていた。しかし結局のところ、パウロ書簡を通じて表現されているキリスト教的な事実は生経験が、どのような点において歴史であるのかを明らかにすることのないまま講義は終わってしまった。続く 1921 年夏学期講義「アウグスティヌスと新プラトン主義」は、アウグスティヌスの『告白』第 10 巻の解釈を行うものであるが、先のテーゼは、この講義においても十分に解明されないままである。

他方でこの講義は、アウグスティヌスが語るような事実は生を、絶えず神からの離反という危険の下にあるものとして提示するが、そうした生がどのようにして「幸福な生(神の享受)」に到達することができるのかという問いには答えないままであった。

未解決に留まったこれら二つの論点は、一見すると無関係なように思われるが、本発表の目的は、それら二つの問題が内的に絡み合ったものであることを示すことにある。

本発表は講義が立ち入って論じることをしなかった『告白』第 10 巻第 43 章を検討することによって、キリスト教的な事実は生経験に固有の歴史性が救済史的に成立することを示し、幸福な生が救済者としてのイエスを介して到達されうることを論じる。本発表の見立てを予め述べるならば、実際に未解決に終わったこれら二つの点—キリスト教的な事実は生経験に固有の歴史性と幸福な生への到達可能性—は、メシアとしてのイエス・キリストへの信仰を通じて結びついているのである。先のテーゼで掲げられていたような歴史性は、幸福な生への到達の契機となるような仲介者によって初めて成立しうるのである。

冒頭での「事実は生は歴史である」というテーゼとともに 1920/21 年冬学期講義が目指すのは、「歴史」を初めから客観的な時系列によって秩序づけられたものとして捉えずに、我々自身が「歴史」であるような、従来の歴史概念とは全く別の「歴史」を示すことである。実際に講義でも「歴史は我々に襲い掛かり、そして我々は歴史それ自体である」(GA60, 80)

とされている。それゆえに同講義は、事後的生が具えるこうした新たな歴史性が一体どのようなものなのかという問いに答えなければならないだろう。

他方で 1921 年夏学期講義は、アウグスティヌスが『告白』のテキストを通じて行うような神の探求そのものが、そのようにして神を探し求める事後的生の事実性を作り上げることを指摘する。「幸福な生」を求めるような探求こそが、事後的生の事実性を新たに生み出すことになるのである。しかし、そのようにして生み出される事後的生は、神からの離反の危険という「絶え間なき試練」として自己の事実性を作り上げることになる。神を探し求めるはずの事後的生が、神からの離反という危険に絶えず晒されているようなものとして自己自身を形成するがゆえに、どのようにして幸福な生に到達することができるのかという問いは一層緊張したものとなるだろう。

そこで本発表は、これら未解決のままに残された二つの問いに答えるために、講義では取り扱われなかった『告白』第 10 卷第 43 章に立ち返る。というのも、仲介者としてのイエスという契機が見出される第 43 章の考察によって、それら二つの問いの答えは結びつけられるように思われるからである。本発表は、この仲介者としてのイエスへの依拠こそが、神の探求の果てに辿り着く幸福な生と、キリスト教的な事後的生経験に固有の歴史性との繋がりを成立させることを論じたい。さらに、イエスへの信仰を通じて開かれる固有なキリスト教的な歴史性の次元が、のちの『存在と時間』における「反復」の問題系を準備している可能性についても示唆したい。

ハイデガー・フォーラム第 21 回大会

発表要旨 4

(自由テーマ)

結局のところ、1919 年のハイデガーは リッカートの何を批判していたのか ——ラスクとフッサールを經由して

Th・キシエル (Th. Kiesel) による初期ハイデガー研究の大著が出版されてこのかた、主として新カント派の影響下で過ごした 1910 年代の修学時代から、その独自の思索への一云ってしまえば、私たちが知る〈ハイデガー〉への「突破／決別」(der Durchbruch) が果たされたのは、(およそ) 1919 年のことだと解されている。

とはいえ、たとえば 1919 年の戦後緊急学期講義「哲学の理念と世界観問題」や、同年の夏学期講義「現象学と超越論的価値哲学」において (GA 56/57)、若きハイデガーがそれまで薫陶を受けていた新カント派の哲学とのあいだでいかなる「突破／決別」を果たしたのかは、依然としてさほど判明ではないと思われる。とりわけ、ハイデガーがその指導教員であった H・リッカートの価値哲学といかに対決していたのかは、たとえば E・ラスクと比べて、論じられることも少ないと云ってよいと思われる。そこで本発表では、そうした欠をいささかなりとも埋めることをさしあたりの目的としたい。

とはいえ、ハイデガーの講義での批判・主張はやはり圧縮されたものになっており、その真意を汲みとるのは簡単な作業ではない。そのために本発表は、ハイデガーを解釈するための補助線にするために、そしてまた、本研究を位置づけることのできる地平を幾許か拡張するために、以下のふたつのポイントを盛りこんだ解釈を提示することを目指したい。

- (1) ハイデガーによれば、1919 年夏学期講義におけるリッカートにたいする批判の骨子は、すでに 1913 年にラスクの思想を契機に形成されたものであるということ (vgl. GA 56/57, 180 f.)。
- (2) ハイデガーが同講義において、E・フッサールが同年に行っていた講義『自然と精神』(Natur und Geist) を参照指示しているほか (GA 56/57, 165, 169.)、『イデーニ II』の原草稿にも目を通していただと思われるということ (vgl. 榊原 (2000), 12)。

これらのポイントを踏まえたときに気掛かりになるのは、一方では、1913年の段階で形成されていたという（ラスク経由の）リッカートへの批判の内実がどのようなものであり、また他方では、そのようにして1919年にはすでに土台ができていた批判にフッサールが与えた影響がどのようなものだったか、ということである。たしかにフッサールの影響は、ハイデガーの思索のほぼ最初期にあたる1910年代初頭からあったものの、そのさいの影響は基本的に、ラスク（やリッカート）の思想と絡まったものであったと思われる。だが、1916年にフッサールがリッカートの跡を襲い、ハイデガーが個人的な指導を受けるようになったことで、その影響は変質した可能性がある。たとえば1919年のハイデガーは、リッカートにおける価値としての真理を批判するにあたって、「価値として説明すること」（Für-Wert-Erklären）と「価値覚すること」（Wertnehmen）という『イデーニ II』期のフッサールに由来すると思しき表現・発想を活用しているのである（vgl. GA 56/57, 48）。そしてまた興味深いことに、当時やそれ以降のフッサールは、「自然と精神」という主題で独自のリッカート批判を展開してもいたのである。

以上のようなことを踏まえて本発表は、1919年当時の〈ハイデガー・フッサール・リッカート（ラスク）〉の関係性を、ハイデガー研究として可能なかぎり追求することで、あまり知られていない当時の「突破／決別」の内実に新たなひかりを投げかけることを目指したい。

参考文献

- ・ [GA 56/57] Heidegger, M. (1987): Zur Bestimmung der Philosophie, Bd. 56/57 der Gesamtausgabe, hrsg. v. B. Heimbüchel, Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann.
- ・ 榊原 哲也 (2000): 「起源への遡行と解体—初期ハイデガーとフッサールとを繋ぐもの—」『創文』(424)、11-14 ページ。